

Column Bar 信州 第61回 テーマ 『かのように』

『Column Bar 信州』 今宵もOPENです。

さて、当店は、皆さんにバーテンダーになってもらい、

テーマにあったオリジナルのコラム=カクテルを振る舞っていただくという趣向です。

お客さんはメルマガ読者さんです。



『Column Bar 信州』 音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCv5e0gxXpE28Mbd0A1iGz2R>

今回は、信州読書会キャスの特別企画『かのように ナイト』と題して

文豪・森鷗外の短編小説『かのように』の読書感想文を書いていただきました。

青空文庫はこちらです

http://www.aozora.gr.jp/cards/000129/files/678_22884.html

朗読はこちら

<https://youtu.be/tm264aniWzU>

『 かのよう に 』 感想 ～ 折り合いの果て ～

この小説の読後、あるネットの記事を思い出した。「米国で進化論を信じる人が過半数超え」（日経ビジネスオンライン）という2015年の記事だ。

私はこの記事を読んだ際、「？」が頭の周りを飛んだ。「え！進化論って、至極ベーシックなことじゃないの？だって、そう習ったし・・・。」

以前、池上彰氏の番組でも、創世記の字義通り、天地創造がなされたとして進化論を否定する「創造博物館」の紹介をしていた。その際、現在も約4割の米国人が創造説を支持していると言っていた。科学的に発展した国でのデータに、驚きを禁じ得なかった。

ただ、この4割の米国人のほとんどが宗教的に真実だと信じ、「かのよう に」信じている人は少ないように感じた。

ただ、秀麿は自らの論文の為に、勉強する必要のない梵語の手ほどきを受け、突き詰めてしまう質ゆえに「かのよう に」できなかった。神話と歴史をひとつにして考えられないことが危険思想に陥ってしまうと苦悩する。秀麿の父は、将来は皇室の藩屏になってくれる期待のために洋行をさせ、その洋行での学問が秀麿を苦しめる皮肉を生んでしまった。

だが、ドイツでは政治の為に宗教の必要性を認識し、上手に折り合いをつけていることに、秀麿は自らの光明を見つける。

まさに、米国大統領は現在も、選挙のために創造論派に配慮し、創造論を否定しない。キリスト教信者が多い米国では、長い間創造論が社会の基礎になってきた。日本が、皇統の神話を信じてきたように。

それでも秀麿は、どうしても歴史と神話の限界をはっきりとさせないと前に進めない。秀麿の考えは、確かに学問としては理解できる。でも、綾小路のように「かのよう に」がなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものはかのよう にを中心に行っている。」との現実も事実なのだ。

私自身は、秀麿のように矛盾にも気を遣わず、綾小路のように「かのよう に」で敢えて折り合いを考えるようなこともなかった。それは、秀麿のような苦悩と引き換えに、寂しいような心持ちがした。

(おわり)

岡山読書会のブログです <http://ameblo.jp/kaoru8913/>

『かのように』 読書感想文

この小説のような日本の純文学のジャンルはほとんど読んだことがない。恥ずかしいが昨年夏目漱石の『こころ』を初めて読んだくらいだ。漢字や文体が違うだけで拒否反応が出てしまう。この小説に出てくる天皇制や神話のことも日本史で習ったかもしれないが、自分の頭の中では神様も仏様も一緒くたになっているし、なかなか興味も湧かない。そんな中で今回の課題図書を読んだが、内容理解ができているかかなり不安だ。

『かのように』では、歴史を専攻しようとしている秀麿がドイツ留学で養った歴史観(客観的な史実と宗教的な言い伝えの分離)を、今後自分の著作にどう表現して取り入れていくか。取り入れたら父や世間から危険思想と言われはすまいかという葛藤、特に自分の後ろ盾である父との関係の悩みを描いている小説だと感じた。

生まれた家、自分の身分とこれからの生業、自分が作っていきたい歴史研究のフィールドとをどう折り合いをつけていくか。秀麿は事業の圧迫と家庭の空気の緊張から逃げたいために本を読んでいる、そして読んだ本で益々自分の歴史観が定まっていく。一方、父との折り合いの矛盾は心の中で悶々と広がっていく。

父は息子の思想的な目覚めや悩みにほとんど気づいているけれど、表立った衝突はせずに様子を見ている。宗教問題に深入りさせたくない親の気持ち。

私も自分の子どもが思想的な目覚めを迎えたとき、どんな態度を取れば良いのか考えさせられる。私の親は寛容だった。久しぶりに大学の下宿を訪ねてみると政党の機関紙が置いてあった心配や不安は大きかったと思うが何も触れずにいてくれた。しかし当の私自身は、自分の思想的な目覚めと世間との折り合いがうまく行った記憶がないため、返って自分の子どもには保守的な態度を取ってしまいそうで怖い。そんな気持ちが沸き立った小説だった。

日本の純文学はこんな真面目な課題を正面から突きつけられるものが多いのだろうか。時代の違いがあるとはいえ同じ文化の土台に生きているだけに、逃げ場がないように感じる。ますます足が遠のいてしまいそうだ…。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォーbelouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

「かのように」感想文

森鷗外の「かのように」を初めて読んだ。明治時代の華族のエリート青年がドイツへの留学体験を経て神話、宗教などの暗黙の前提のようなものが突き詰めて考えていくと実体のないものであることに思い至り、そのことから目を背けられなくなる苦悩を描いている。

短編の小説で、主人公の秀麿の内面が主題でありながら、秀麿のモノローグ以外にも父（子爵）、母（奥さん）、友人の綾小路の視点を通して秀麿の内面が描かれていく。

同時代の文豪夏目漱石の小説も同様だが、扱っているテーマは現代で扱っても違和感がないような、古臭さを感じさせない内容でそれが今なお読み継がれる所以でもある。

現代に目を転じて、物事の根源をあばくことはタブー視されていて、テレビのコメンテーターも語ってはいけない暗黙の了解があるのだろうし、メディアや一般の人々の生活でも触れてはいけないとされている内容は多いのだろう。

秀麿はあばくことで危険思想だと思われぬか、父親をどう納得させようかなどと葛藤しているが、いつの時代でもタブーに触れようと試みる者は同様の葛藤を抱くことは想像に難くない。

一方で「かのような」前提があることで幾何学が成立したり、自然科学が発展することでそれが現実生活に応用され、我々の社会が豊かな方向に進歩しているという面もあることは事実である。

そのため、大人が取るのはその暗黙の前提があることをあばくことなく、しかしそれを認識した上で現実生活での利益を追求していくという態度であろう。

余談ではあるが、作中に書かれているドイツの統治の方法は、佐藤優氏がしばしば解説している宗教的なバックグラウンドを踏まえた上での地政学を連想させる。島国でキリスト教を受け入れるか、排除するかという程度の宗教的問題にしか直面していない日本で生活してきた我々として馴染みが薄いものであるが、素養として知っておきたい。

(おわり)

『かのようにの私たち』

「人生のあらゆる価値のあるものは、かのようにを中心に行っている。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭を屈めたように、僕はかのようにの前に敬虔に頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切った、純潔な感情なのだ。道德だってそうだ。」

本文からの引用である。私は二つの点で気になった。

一つには前半の部分で、(これはファイヒンガーの影響であろうか)ハルナックを秀麿が信奉していることを考え合わせると、当時のドイツが異端と思われる信仰が流行していたと思われ、二つにはそれに続けて、カントからの影響が描かれているからである。

私個人の解釈として、カントは彼自身の信仰が働いたときの、理性の振る舞いを記述することで、彼の哲学を築き上げた。それは信仰の残像で、もし宗教書としてとらえたなら、偶像のように役に立たない書物であろう。

秀麿は、「かのように」の実例をいくつか説明しているが、そのみならず私たちは、無意識のうちにこの世界を、そして私たちの存在自体を概念として、つまり「かのように」を土台にしているものとして、捉えてしまっているのではなからうか。私にはこの世界をダイレクトに捉えることは、ほとんど不可能に思える。

「かのように」には、私たちの先天的な属性が見出せると思う(秀麿が敬意を払うのはその部分でのみではないかもしれないが)。対象が先天的であるにせよ、それを意識するのみでは、それはこの世の財産に過ぎない。私たちは、それを世俗的にしか意識できないからだ。それ故カント哲学は、哲学というわりに予め対象者を定めているが、その効果も限定的なのだろう。

秀麿は仕事を進めるにあたって、世間の反発が障害になると予想するが、そもそも「かのように」を「かのように」で説明しきれぬのかという問題がある。私たちは自らを記述しきれない。私たちは自らを不自由にしかできない。

(おわり)

宮澤です。

『ワンレン・ボディコン・かのように』

「お前の先祖は猿じゃないか！」と言われれば、誰だって良い気はしない。

猿以上なものかだと、日本人としての私は、心のなかで、反発する。

人は思い出を飾りたがり、都合の悪いことは見ないふりする。

バブル世代は、ワンレン・ボディコン・館ひろし的なバブル自慢をするが

バブル崩壊後の借金は、話したがない。

森鷗外の短編小説『かのように』の主人公、秀麿は歴史を専攻しており、

ドイツに留学して、神学という学問を知った。

神学を研究しているからといって、信仰が必要なわけではない。

人間は、社会生活を送るうえで、目に見えないものを必要としている。

生物学的には、先祖は猿であるのだが、猿にはなくて人間にあるものがある。

それは「理性」である。

ものごとを筋道立てて考える能力だ。

人間の社会が、広範囲に組織だっているのは理性のおかげである。

しかし、ヨーロッパ人は、何度も戦争して理性の限界に行き当たった。

神は目に見えないし、神話も実際あった歴史的事実ではない。

それは、理性の限界を超えた問題である。要するに信じるか信じないかの話だ。

でも、国家や民族が、お互い信じるか信じないかに白黒つけようとするとは悲惨なことになる。

だから、神も神話も必要だということを、ヨーロッパ人は理解している。

ただ、信じるか信じないかは、「あなた次第だ！」というルールで暮らしている。

信仰の程度はちがっても、みんな、神はある『かのように』振る舞うことで、社会秩序が成り立っている。

これが、ヨーロッパ近代社会の土台であることを秀磨は悟った。

ヨーロッパの啓蒙主義や神学にふれて、日本人はようやく理性の限界にたどりつくのだ。

しかし、多くの日本人は理性の限界など感じたことがない。

日本人であれば、日本の神も神話も、無自覚に信じざるを得ない。

そして無自覚に信じていることへの自覚がない。

日本で、『かのように』を説明すると、

『そんな考え方して楽しいですか？』と腫れ物に触れるように扱われてしまう。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714